

5:キルケゴールとバルト5-1:キルケゴール1:キルケゴールの思想的な特徴

宗教批判者としてのキルケゴール(1813 ~ 1855)

真のキリスト教と近代市民社会において墮落したキリスト教

カール・バルト(啓示と宗教との区別)

反ヘーゲル主義 実存主義の先駆者

真理:客観性としての真理 / 主体性としての真理

体系:論理学の体系は可能である(諸イデアの相互関係) / しかし、歴史的な現実存在(実存)に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性:信仰はキリストと信仰者とが同時に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

仮名と実名の二種類の著作 思想の表現形式、レトリックに注目

仮名の意味:1.小説あるいはフィクション性 著作自体に注意を集中(詩的機能)

2.一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性

「私自身は、ヨハネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」

『死に至る病』:副題:教化と覚醒を目的とする(=建徳的)

2:キルケゴールの宗教批判(現代批判と市民社会のキリスト教)

1.「コルサル事件」(1846年)、週刊新聞『コルサル』(ゴシップ暴露)

2.キルケゴールの現代批判(『文学評論』の第2章)

・革命の時代と分別の時代、反省の時代、情熱のない時代

水平化と外面性 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの

・宗教的信仰:個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄

宗教者にとってきびしい試練、修養 「良き戦い」として人生(天路歷程)

・沈黙、無関心を装った教会 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき 使命をもつ教会(戦う教会)という任務の放棄

3:単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、- かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとり立つことである」 単独者 ルター信仰

人間論の伝統:人間を統合と捉える議論、デカルトにおける、心(思惟)と身体(延長)という二つの実体の合成としての人間。両極性における人間存在の分析。

人間の自己:自己関係という構造を組み入れた関係的存在

自己反省、自己言及性(自己参照性)

自己関係:「.....」「自己」に関係する関係)に関係する関係).....」 無限に多重化する存在者である。

自己 = 生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 本来的な自己、真の自己になるという課題

関係存在としての自己の存在根拠

- 1:人間は自己自身の中にその存在根拠を有する 自己組織化
始まりの問題(宇宙の始まりのその前)と無限遡及のパラドックス
- 2:関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場
人間 = 自己関係的存在 自己になる課題 不安と絶望の可能性

4:実存弁証法と真のキリスト者への道

「美的段階 倫理的段階 宗教性A 宗教性B」という精神の発展プロセス

[美的段階]:美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方

[倫理的段階]:倫理的なものが原理または目的とする生き方

- 3.「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心は燃えても、肉体は弱い」(マタイ26:41)。
[宗教性A]:「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」
4. 宗教性AとBとの関係(宗教性一般の立場からキリスト教へ)
5. [宗教性B]:同時性、あるいは絶対的逆説性
6. 市民社会において墮落したキリスト教(精神性から脱落)と異教(無精神性)

5:キルケゴールの問題性

7. キルケゴールとマルクス、ニーチェ
8. 個人と社会・共同体との関係
個人の主体性の強調 単なる抽象論、大衆の蔑視 エリート主義あるいは単なる変わり者

5 - 2:バルト

- 9.フョイエルバッハへ評価の二面性
- 10.神から(上から)・啓示
- 11.啓示と宗教との区別

6:宗教批判の諸問題

近代的な宗教批判の特徴と問題点

宗教批判の基本的論理:欲望を充足させてくれる神の投影と実体化の傾向

宗教批判と社会批判の内的連関:幻想の暴露 = 啓蒙!

宗教批判の宗教思想としての意義:宗教批判から宗教の自己批判 = 宗教機能の実現

宗教批判の人間観の一面性 「イマジネーション」「想像力」積極的再評価へ

< 文献 >

- 1.キルケゴール『現代の批判』『不安の概念』『死に至る病』(岩波文庫)『哲学的断片』『哲学的断片へのむすびとしての非学問的あとがき』(『キルケゴール著作集』 白水社)
- 2.武藤一雄 『キルケゴール』(創文社) 3.小川圭治 『キルケゴール』(講談社)
- 4.レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』(岩波書店)5.ディーム 『キルケゴールの実存弁証法』(創言社)6.川村永子 『キルケゴールの研究』(近代文藝社)8.マッキノン他『キルケゴール - 新しい解釈の試み - 』(昭和堂) 9.大木英夫『バルト』(講談社)10.バルト『教会教義学』『バルト著作集』(新教出版社)